

左側に転覆する列車

—ディケンズと脳梗塞について—

The Carriage that Goes Over on the Left Side:

Dickens and Cerebrovascular Accident

金山 亮太

Ryota KANAYAMA

‘I cannot bear railway travelling yet. A perfect conviction, against the senses, that the carriage is down on one side (and generally that is the left, and *not* the side on which the carriage in the accident really went over), comes upon me with anything like speed, and is inexpressibly distressing.’

—John Forster, *The Life of Charles Dickens*.¹

序

チャールズ・ディケンズが晩年に創作力の衰えを感じていたことは、彼の友人ジョン・フォースターの伝記によって早くから研究者には知られていた。1861年に *Great Expectations* を完成させて以来、彼の精力は雑誌 *All the Year Round* の編集と、1858年頃から手を染め始めた有料公開朗読などに費やされることが多くなり、結果的に創作に割かれる時間は減らざるを得なかった。1864年によく *Our Mutual Friend* の連載が始まった際には、入念なプロットを事前に練り上げ、完璧を期して書き始めたものの、途中で予定ページ数を間違ったりするなど、かつての彼には考えられないようなミスもあり、ディケンズ自身としてもミステリー仕立てのこの小説の執筆には色々と苦勞が付き物であったことを「前書きに代える後書き」で述べている。² 特にその締めくくりにある文章は、1865年に彼が出くわした、とある事件のことを想起させるものとして、われわれの目を引く。

On Friday the Ninth of June in the present year, Mr and Mrs Boffin

(in the manuscript dress of receiving Mr and Mrs Lammle at breakfast) were on the South Eastern Railway with me, in a terribly destructive accident. When I had done what I could to help others, I climbed back into my carriage—nearly turned over a viaduct, and caught aslant upon the turn—to extricate the worthy couple. They were much soiled, but otherwise unhurt. The same happy result attended Miss Bella Wilfer on her wedding day, and Mr Riderhood inspecting Bradley Headstone's red handkerchief as he lay asleep. I remember with devout thankfulness that I can never be much nearer parting company with my readers against my life, the two words with which I have this day closed this book: —THE END.³

ここで述べられているのは、*Our Mutual Friend* の連載が結末に向かっていった 1865 年 6 月 9 日、彼がフランスからの帰りにサウス・イースタン鉄道に乗っていた折にケント州ステーブルハースト駅で列車転覆事故に遭遇し、車内に置き忘れた原稿を取りに戻った時の様子である。「終わり」という言葉がこれほど身近なものに感じられたことはなかった、という述懐は本音であったろう。実際、彼の載っていた客車は転覆を免れたものの、他の車両に乗っていた乗客は多数が死傷し、ディケンズ自身、彼らの救出に大活躍をしたのである。彼はその後、今日ならば PTSD とでも分類されそうな、一種の乗り物恐怖症に悩まされるようになった。本稿の冒頭に挙げた一節は、少しでも列車のスピードが出ると、本当はそうではないと分かっているにもかかわらず、列車がたいてい左側に（実際には右側に転覆したのだが）転覆しそうな気がしてきて気分が悪くなる、と彼がフォースターに弱音を吐いている箇所である。何故、ディケンズは鉄道事故後、このような幻想に悩まされるようになったのか。また、晩年になって様々な身体の不調を訴えていた彼の身体には何が起こりつつあったのか。これらには彼自身が患っていたと思しき脳疾患が関わっているように思われる。本稿は 19 世紀にその萌芽を持ち、20 世紀になって飛躍的に発展を遂げた大脳生理学研究の一端にディケンズが図らずも関わっていたことを示そうとするスケッチである。

1.

Sally P. Springer と Georg Deutsch は 1836 年に Marc Dax というフランス人医師がモンペリエの学会で失語症に関する研究発表をしたことを 19 世紀以降の大脳生理学の発展の端緒として描いている。脳損傷と失語症との関係については古代ギリシャの頃の文献にさえ登場するほどであるが、このダックスという

医師は40人以上の患者の臨床例から左脳半球の損傷と失語症との間に関連があることを指摘した点によって、心理学の教科書にその名を記録されることになったのである。いわば「ニュートンのリング」のエピソードの如く、この医師はこれまで他の多くの医師が見逃していた現象に注目したのであった。ただし、彼の研究発表はほとんど聴衆の関心を引きつけることもなく、ダックス自身も翌1837年にこの世を去る。したがって、彼の研究発表の先見性は後世の研究者の追認を待たねばならなかった。⁴

ところで、そのような医療の現場に直接居合わせたわけでもないディケンズが、ダックス医師の研究発表から10年後、*Dombey and Son* (1846-48) という、彼にとって執筆計画を初めて本格的に練り上げて書いた作品の中に失語症を発症した人物を登場させていることは興味深い。ドンビー父子商会なる個人商店の経営者であるポール・ドンビー氏が待望の男子誕生を喜ぶ場面から始まるこの小説は、妻の死に続いてその長男にも夭折され、美しいが高慢な後妻にまで裏切られた男が、これまで邪険にしていた長女とその結婚相手によって老後を穏やかに送るという筋立てである。この小説に登場する失語症患者とは彼の再婚相手である Edith Granger (彼女もまた未亡人である) の実母で、Mrs. Skewton という本名を持ちながら、小説内では Cleopatra という皮肉を込めた愛称で言及されることの多い70歳の老女である。既に歩行困難があるらしく、外出時には車椅子に乗っている彼女が発作を起こす場面は以下の通りである。

Edith hurried with her to her mother's room. Cleopatra was arrayed in full dress, with the diamonds, short sleeves ,rouge, curls, teeth, and other juvenility all complete; but Paralysis was not to be deceived, had known her for the object of its errand, and had struck her at her glass, where she lay like a horrible doll that had tumbled down.

They took her to pieces in very shame, and put the little of her that was real on a bed. Doctors were sent for, and soon came. Powerful remedies were resorted to; opinions given that she would rally from this shock, but would not survive another; and there she lay speechless, and staring at the ceiling, for days; sometimes making inarticulate sounds in answer to such questions as did she know who were present, and the like: sometimes giving no reply either by sign or gesture, or in her unwinking eyes.

At length she began to recover consciousness, and in some degree the power of motion, though not yet of speech. *One day the use of her right hand returned*; and showing it to her maid who was in attendance on her, and appearing very uneasy in her mind, she made signs for a pencil and some

paper. This the maid immediately provided, thinking she was going to make a will, or write some last request; and Mrs Dombey being from home, the maid awaited the result with solemn feelings.

After much painful scrawling and erasing, and putting in of wrong characters, which seemed to tumble out of the pencil of their own accord, the old woman produced this document: 'Rose-coloured curtains.'⁵

ここで注目したいのは、身体不随の状態になったスキュートン夫人の回復の兆しとして、まず意識が戻り、身動きができるようになり、次に「右手が使えるようになった」ことをディケンズが記録している点である。まだ喋ることのできない彼女は侍女に命じて筆記具を持ってこさせ、顔色を少しでも明るく見せるために「バラ色のカーテン」を要求する。老齢にありながら、未だ若い頃のコケットリーを失わない彼女のことを描写する作者の筆致にはいささか嘲笑するような感じが感じられるが、それ以上にわれわれに強い印象を与えるのは、その観察力の確かさである。この後スキュートン夫人は再び喋れるようになるものの、その後再び病床に就き、娘との和解を果たした後でこの世を去るのであるが、その臨終の直前の場面でも彼女は 'a dumb old woman lies upon the bed, and half of her is dead' と描写され⁶、言葉が出なくなる様子と「彼女の半分が死んでいる」状態が言及される。

これほど詳しい描写ができるためには、ディケンズ自身が失語症患者を身近に知っていたか、あるいは少なくとも医療関係者に知人がいた可能性が考えられるが、この場面について具体的なヒントを得たと思われる事実は確定できていない。ただ、1823年に Thomas Wakley (1795–1862) によって創刊された医学雑誌 *The Lancet* には注目していたようである。このワクリーという外科医は、まだ前近代的な体質の残る 19 世紀初期の英国医療の問題点や悪弊を糾弾するなどし、1835 年には下院議員となり、1839 年には検死官となって検死法廷の改革に努め、また 1860 年に提出した *Adulteration of Food and Drink Act* によって、市場に様々な粗悪品が出回っていた食料品の品質保証を求めるなど、医療だけにとどまらず、ヴィクトリア朝の公共衛生の基盤を作った人物でもあった。ジャーナリズム畑出身のディケンズが *Oliver Twist* (1837) において新救貧法の不備を訴え、*Nicholas Nickleby* (1838–39) では寄宿学校の退廃を描写したことからも明らかなように、この 2 人には社会の不正に対する激しい怒りとより良い社会を作ろうとする情熱という共通点があり、実際、ディケンズ自身 1840 年 1 月 14 日に実施された検死審問に立ち会い、そこでワクリーの仕事ぶりを後に賞賛している。⁷ 1836 年のダックス医師による研究発表の抄訳が『ランセット』

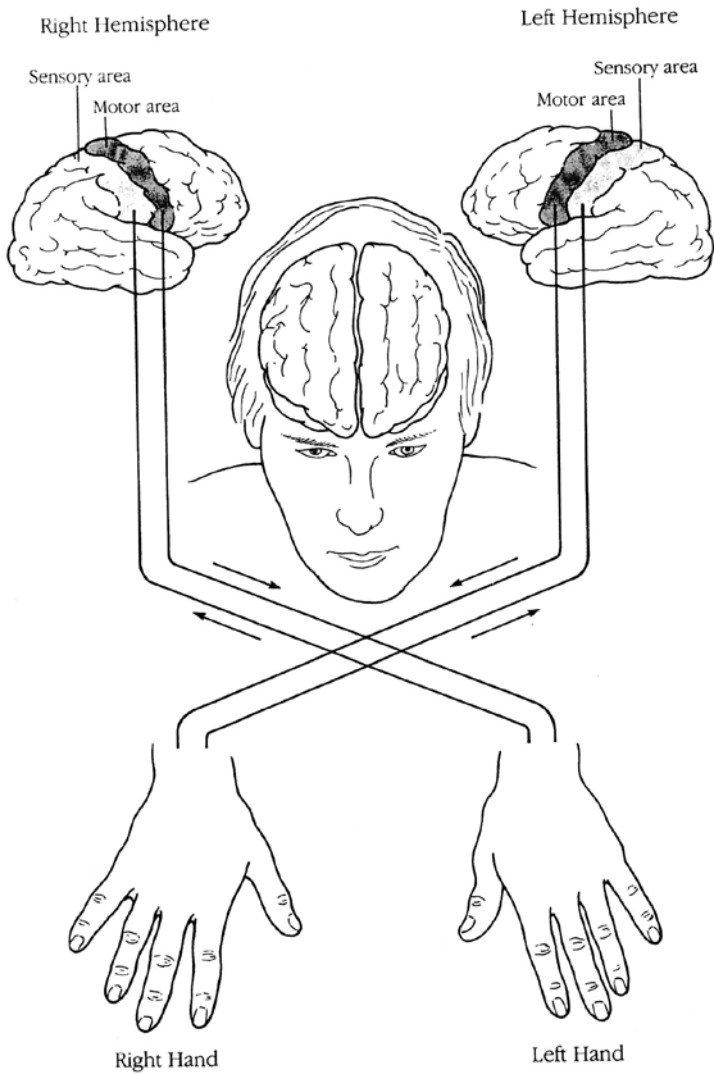


図1 Motor control and sensory pathways between the brain and the rest of the body are almost completely crossed. Each hand is primarily served by the cerebral hemisphere on the opposite side.

に掲載されていたかどうかは未確認であるが、少なくともディケンズは当時の医療に対して関心を持っていたことだけは確かなようである。

今一度、彼が描写した失語症患者の描写に戻ってみよう。スキュートン夫人の身体には麻痺があり、彼女は口もきけない状態で数日を過ごしたとある。そしてまず右手が動くようになり、次に文字を書き始め、最終的に会話ができるまでになる。図1に見られるように、脳半球は交差的に身体を支配しているのであり、右脳半球によって左半身が、左脳半球によって右半身が支配されている。彼女を襲ったのはおそらく左脳半球への一時的な脳梗塞であり、そのせいで右半身に麻痺が強く出て手が動かなくなったのであって、彼女に失語症的な症状が出たことは、図2に見られる左脳半球の前頭葉にあるブローカ中枢に対する梗塞の結果であると想像される。作品中で彼女が車椅子を使っている挿絵が繰り返し使われていることから、彼女は初めから身体麻痺を伴った人物として造型されていた可能性が高い。⁸そして、脳梗塞の症状が軽減することによって、まず右手の運動機能が回復し、次に言語機能が回復したと考えることは十分可能であろう。このように考えると、ディケンズはまさしく作品の中で19世紀後半における大脳生理学の飛躍的発展の方向性を予期していたかのよ

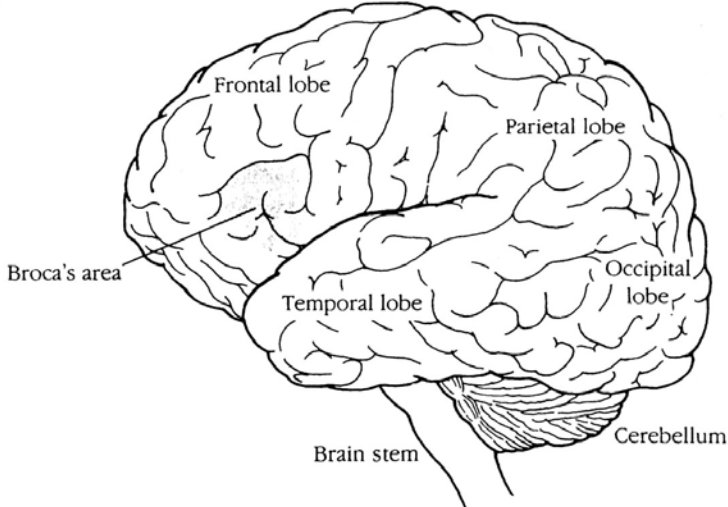


図2 The location of Broca's area in the left cerebral hemisphere.

うな描写を行っていたことになる。そして、皮肉なことに、彼はまさしく大脳生理学的にしか解釈できないような病状を晩年に発症するのである。

2.

1856年3月にロチェスター近郊のギャッツ・ヒル邸を購入したディケンズは、若い頃からの習慣であった散歩好きをここで更に昂進させることになった。ジャーナリスト時代にロンドンの町中を夜通し歩き回ったり、夜を徹して走る郵便馬車の中で速記原稿を新聞記事にまとめるなどといった超人的行動力を発揮していた彼にとって、田舎を散歩するというのは晩年の彼なりの楽しみだったのかも知れない。彼は具合が悪いときや筆が進まないときなどの荒療治として、長距離の散歩を自らに課すことで「喝」を入れようとした、とフォースターは言う。そして、そのやり過ぎが遂に左足の腫れという形で現れた。1865年の2月21日付けのフォースター宛の手紙で、ディケンズは足に凍傷が出たことを訴える。

‘I got frost-bitten by walking continually in the snow, and getting wet in the feet daily. My boots hardened and softened, hardened and softened, my left foot swelled, and I still forced the boot on; sat in it to write, half the day; walked in it through the snow, the other half; forced the boot on again the next morning; sat and walked again; and being accustomed to all sorts of changes in my feet, took no heed. At length, going out as usual, I fell lame on the walk, and had to limp home dead lame, through the snow, for the last three miles.’⁹

これ以降、彼の不調は左半身（特に左脚）を中心に現れることはフォースターによって注意深く書きとめられている。1866年4月14日付けの手紙で、ディケンズは公開朗読の講演旅行の旅先から体調の不良を訴えている。‘I have so severe a pain in the ball of my left eye that it makes it hard for me to do anything after 100 miles shaking since breakfast. My cold is no better, nor my hand either.’ この手紙を引用した後で、フォースターは読者に注意を喚起する。‘It was his left eye, it will be noted, as it was his left foot and hand; the irritability or faintness of heart was also of course on the left side; and it was on the same left side he felt most of the effect of the railway accident.’¹⁰ ここでわれわれは、冒頭の鉄道事故の一件を確認する必要があるだろう。

1865年6月9日に発生したこの事故は、線路補修をしていた所にディケン

ズの乗ったフォークストン発ロンドン行き列車が進入し、橋脚から5, 6台の列車が川に転落し、10人の死者と20人の負傷者を出したものであった。その翌日、彼はフォスターに短い手紙を寄せ、13日には別の友人に事故の様子をかなり詳しく描写している。ここでは後者の手紙を検討してみたい。

My dear Mitton, —I should have written to you yesterday or the day before, if I had been quite up to writing.

I was in the only carriage that did not go over into the stream. It was caught upon the turn by some of the ruin of the bridge, and hung suspended and balanced in an apparently impossible manner. Two ladies were my fellow-passengers, and old one and a young one. This is exactly what passed. You may judge from it the precise length of the suspense: suddenly we were off the rail, and beating the ground as the car of a half-emptied balloon might. The old lady cried out, 'My God!' and the young one screamed. I caught hold of them both (the old lady sat opposite and the young one on my left), and said: 'We can't help ourselves, but we can be quiet and composed. Pray don't cry out.' The old lady immediately answered: 'Thank you. Rely upon me. Upon my soul I will be quiet.' We were then all tilted down together in a corner of the carriage, and stopped. I said to them thereupon: 'You may be sure nothing worse can happen. Our danger *must* be over. Will you remain here without stirring, while I get out of the window?' They both answered quite collectedly, 'Yes,' and I got out without the least notion what had happened. Fortunately I got out with great caution and stood upon the step. Looking down I saw the bridge gone, and nothing below me but the line of rail.

I don't want to be examined at the inquest and I don't want to write about it. I could do no good either way, and I could only seem to speak about myself, which, of course, I would rather not do. I am keeping very quiet here. I have a —I don't know what to call it—constitutional (I suppose) presence of mind, and was not in the least fluttered at the time. I instantly remembered that I had the MS. of a number with me, and clambered back into the carriage for it. But in writing these scanty words of reflection I feel the shake and am obliged to stop. —Ever faithfully.¹¹

この手紙から分かることは、当時彼の乗っていた一等車のコンパートメントには二人の相客がいたこと、そして事故後に彼がかなり冷静に行動したらしいことである。省略された部分では、実際に彼が救助活動をした様子や死

傷者を目撃したときの様子なども描かれており、その時のことを思い出した途端に震えが来てこれ以上を書き続けられなくなった所で手紙は唐突に終わっている。実際、ディケンズは事故後も長い間、精神的・肉体的不調を訴えることになった。フォースターは伝記において、あまり苦情を口にしなかったものの、6月中は時折ディケンズの口から弱気な言葉が漏れたことを記している。‘I am curiously weak—weak as if I were recovering a long illness.’, ‘I began to feel it more in my head. I sleep well and eat well; but I write half a dozen notes, and turn faint and sick.’, ‘I am getting right, though still low in pulse and very nervous. Driving into Rochester yesterday I felt more shaken than I have since the accident.’, ‘I cannot bear railway traveling yet.’¹²

このように彼は事故後のショックから立ち直ることがなかなかできず、それ以降も列車に乗って大きな振動を受けるたびに冷や汗を流して手摺りにしがみつこうとする様子などが娘によって目撃されている。¹³しかし、これほどまでの衝撃を受けたにも関わらず、翌年には鉄道を乗り継いで公開朗読旅行にディケンズは出かけている。そして、鉄道の振動のせいで左目が痛くなったなどという手紙をフォースターに書き送っていることは既に見たとおりである。列車での移動に対する恐怖感があったはずの彼を、一体何がそこまで追いつめていたのか。フォースターはそれを「残された時間が少ないことを悟ったディケンズが最短の期間に最大の金を儲けること」を唯一の目的としていたからだと言うが、¹⁴それは彼の身体にどのような影響を与えることになったのであろうか。

3.

1868年の夏、ディケンズは奇妙な経験をする。ある日、彼がフォースターの家を訪ねるために町中を歩いていたところ、自分の右側にあった各商店の窓に書いてある文字を半分しか読むことができなかったのである。¹⁵これは図3に示されているように左目がカバーするはずの視野が利かなくなったため、結果的に右半分のものしか視界に入ってこなくなったことを示しているものと思われる。フォースターはこれを、この頃からディケンズの脚は左だけでなく右も悪くなりかかっていたからである、と続けるが、脳半球の交差性を知らなかったであろうフォースターには、それ以外に説明が付けられなかったのであろう。しかし、ディケンズのこの経験はもっと明確な形で記録されることになる。1870年になって、ディケンズは未完の小説となった*The Mystery of Edwin Drood*を1章書き上げるたびに、それを友人たちに読んで聞かせるようにしていたが、1月頃から左手が腫れて包帯で吊っていなければならなくなり、更に3月21日にオックスフォード・ストリートを歩いてくる途中、以前と同じような故障

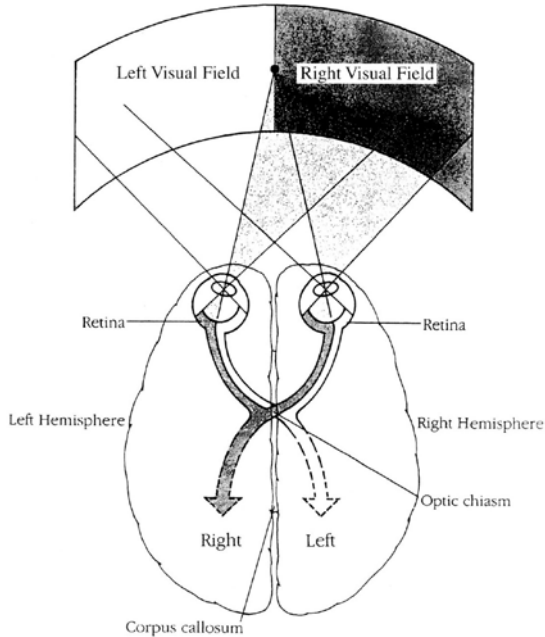


図3 Visual pathways to the hemispheres. When fixating a point, each eye sees both visual fields but sends information about the right visual field only to the left hemisphere and information about the left visual field only to the right hemisphere. This crossover and split is a result of the manner in which the nerve fibers leading from the retina divide at the back of each eye. The visual areas of the left and right hemisphere normally communicate through the corpus callosum. If the callosum is cut and the eyes and head are kept from moving, each hemisphere can see only half of the visual world.

がまた起きて、商店に書かれている名前の右側部分しか読めなかったというのであった。¹⁶ このように、右脳半球における障害は手足だけではなく、視野にまで及んでいたのである。

ディケンズは1865年以降、ずっと左足の痛みに悩まされることになる。同年4月22日の手紙では完治したかのように見える彼の脚は9月には再び悪化し、触れられることすら嫌がるほど過敏になり、特別製の大型ブーツを作らせなければならなかった。1866年1月にはまた脚が痛み出し、一旦収まったものの、また同年8月には症状がぶり返す。これ以降、慢性的に左足の腫れや痛みに悩まされた彼は、頻々と苦境をフォースターに訴える。手紙として残っているだけでも、1867年9月、1868年の前半、1869年の2月、4月と12月、

1870年の5月と、彼の左脚は悲鳴を上げていたようである。最後にはディケンズはびっこを引いて、階段を上れなくなることがあるほどであった。これらの症状に対して、生前のディケンズは痛風という診断には納得せず、あくまでもサイズの合わない靴やブーツのせいで脚が痛んだのが原因であると信じていた。したがって、最後まで湿布や包帯など、外科的な治療しか施さなかったのである。

実は、ディケンズは1869年4月23日に当時の高名な医師サー・トマス・ワトソンの診察を受けているが、そこでは外科的な観察だけでなく、脳外科的あるいは神経内科的な観察も記録されていた。フォースターはこの医師の診察書を1872年6月に託され、そこに書かれていたことが全て左半身の麻痺であることを確認し、全文を伝記に掲載している。

‘After unusual irritability, C. D. found himself, last Saturday or Sunday, giddy, with a tendency to go backwards, and to turn round. Afterwards, desiring to put something on a small table, he pushed it and the table forwards, undesignedly. He had some odd feeling of insecurity about his left leg, as if there was something unnatural about his heel; but he could lift, and he did not drag, his leg. Also he spoke of some strangeness of his left hand and arm; missed the spot on which he wished to lay that hand, unless he carefully looked at it; felt an unreadiness to lift his hands towards his head, especially his left hand—when, for instance, he was brushing his hair.’¹⁷

ここに現れる左半身の麻痺、特に身体を思うように動かすことができないという部分は、ディケンズの右脳半球に脳梗塞があり、左半身への神経の正常な伝達を阻害していたからではないかと考えられるし、空間に対する失認もまた頭頂葉の障害を裏書きするものである。¹⁸ このように、彼の脳疾患は今日の大脳生理学であれば教科書レベルの知識で整理できてしまいそうなものであり、いわば、近代医学の進歩がディケンズの病状の悪化に追いつけなかったのである。皮肉なことに彼が鉄道事故に遭遇した1865年は、かつて彼が *Dombey and Son* で描いてみせた失語症の正式名称 (aphasia) が決定した年であったし、1870年に彼の命を奪ったのも、まるで予期していたかのように脳卒中であった。また、鉄道事故後に彼が友人に向けて書いた手紙の中に表れているのは今日 PTSD (Post-Traumatic Stress Disorder) と呼ばれる症状そのものであり、そういう意味でもディケンズの症例は現代にも通じるものだったと言えるだろう。最後に、実際には右側に転覆したにも関わらず、左側に列車が転覆するような気がして

しょうがないという彼の幻想について今一度考えてみたい。

4.

事故の当日、ディケンズと同じコンパートメントに乗車していたのが、1857年以來彼の愛人であったエレン・ターナンとその母親であったことは今日では動かしがたいものとなっている。一等車の長いすの片方にディケンズ、そしてその左側にエレンが座り、彼らと向き合うような格好でエレンの母が座っていたとすれば、右側に転覆した列車は、まず初めに遠心力の働きによりディケンズの身体を左側のエレンの方向に押し付けることになる。そして今度は反対方向に横からの力が働き、ディケンズの身体はエレンの体重を受け止めて、右側にあったであろう客車の壁とに挟まれる形になったのかも知れない。いずれにせよ、彼らが乗っていた客車は転覆しなかったとはいえ、川に落ちた残りの客車と同様に右に傾こうとする力を受けたことは間違いなさそうである。1865年の2月に左脚の凍傷を訴えていたディケンズの右脳半球に、既に脳梗塞の兆候が出ていたのかどうかは確認のしようもないことであるが、少なくともこの事故によって衝撃を受けたのは彼の精神だけでなく、肉体（特に脳）もであったように思われる。「頭の方に症状が回っているようだ。食事もちゃんとしているしよく眠れているのに、ちょっと書き物をするとう頭がふらふらしたり吐き気がする」と訴えるディケンズの症状がPTSDによるものなのか、それとも微細なレベルでの脳の変調なのかは判断しようがない。しかし、このような症状が彼を不安に陥れたであろうことは容易に想像できる。であればこそ、不安定な左半身の方に列車が転覆するような気がしてならなかったのである。

妻キャサリンと別居、離婚の後、彼の身の世話をしてくれていたのは義妹ジョージナ・ホーガースであったが、それでもディケンズは（既に成人した者が大半だったとはいえ）養育すべき大家族を抱えたヴィクトリア朝の家父長であることに変わりりはなかった。健康状態に不安を抱えた彼が考えなければならぬことは、何よりもまず残された家族に対してしかるべき財産を残してやることであつたらう。それと同時に、彼の晩年を彩った愛人への心遣いも怠るわけにはいかなかった。エレン・ターナン自身はディケンズとの関係を厭っていたとも伝えられるが、そうであればなおさら彼は彼女の気持ちを引き留める必要があつた。*Our Mutual Friend*の連載が終わり、かつての彼ならば直ちに次作の取材や構想に取りかかつたであろうが、今の彼にはそんなことより、いかにして家族や愛人のために金を儲けるかが主たる問題だったのかも知れない。鉄道事故以來、列車に乗ることが内心恐かつたはずのディケンズは、しかし、まさに彼をすんでのところまで殺すところだったこの文明の利器を利用してイギ

リス全土を公開朗読で回り、あげくには二度にわたってアメリカでも興行を打った。そして結果的に、事故による即死ではなく、徐々に身体を痛めつける緩慢な自殺を選んだ形になったのである。

もしかすると、論理構成や言語表現に関わる左脳半球は無事であっても、直感や美的センス、芸術的ひらめきなどを司ると言われる右脳半球の損傷がディケンズの創作意欲を奪っていたのかも知れない。¹⁹ 前期のディケンズの作風は良くも悪くも行き当たりばったりのようなところがあり、話自体に活気があるし登場人物も魅力的なのだが構成はずさんであると言われる一方、後期の彼の作風は綿密に練り上げられたプロットと奥行きのある登場人物とで成熟した魅力なたたえている、というのが文学史的なレベルでの一般的な評価である。ところが、彼の晩年の作品は更に重苦しい雰囲気を漂わせるようになり、登場人物にも若かった頃のディケンズの筆から生み出されたような奔放な魅力が見てとれないという評価があるとすれば、²⁰ それはまさしくこの頃の彼の精神状態の反映であると言えよう。

不自由な左半身と想像力も創造力も十分に働かせることのできない頭を持って余したディケンズは、常に肉体にも精神にも不安を抱えながら、にもかかわらず体力を激しく消耗させる公開朗読で何を達成しようとしていたのだろうか。家族や愛人への体面を保つための、家父長制的義務感に駆られた経済的目的によるものか、それとも枯渇しかかった自分の創作能力に対して聴衆からの拍手喝采という水を与えて、今一度元気を取り戻して次作に取りかかるための栄養補給にするためだったのか。あるいは、長年の習慣である忙しく動き回ることでスランプから脱するという彼特有の「気合い」療法の一つだったのか。おそらく、そのいずれもが彼の目指すところであつたらう。しかし、その背後に潜むのはある種の破滅衝動ではなかったか。若い頃にイギリス中を報道記者として駆け回り、辻馬車が乗合馬車にとって変わられる様をそのデビュー作 *Sketches by Boz* (1834–36) で早くも描き、鉄道が出現してからはその暴力的な魅力の持つ明暗を *Dombey and Son* でいち早く予言した彼は、終生スピードというものに魅せられていたのかも知れない。進歩と発展というヴィクトリア朝のスローガンと共に成長したこの作家は、自分の頭脳と肉体が制御できなくなったときに人類はどうなってしまうかを自ら演じてみせていたのだ。それは増大するエントロピーによって世界が崩壊するといった、プレーキの利かない自爆的な終末、あるいは科学が人間の支配から脱したときにもたらされるであろう悪夢のような終末、また、あるいは T・S・エリオットが「うつろな人間」(*The Hollow Man*, 1925) で予言したような「めめそとした」終末のいずれでもない、ためらうことなく自ら選び取るべき積極的な終末だったのである。

注

- * 本稿は2005年度ディケンズ・フェロウシップ日本支部総会（2005年10月8日：甲南大学）で行われた同名の講演の原稿を一部加筆・修正したものである。この原稿は『新潟大学言語文化研究』第11号（2006年3月刊行）に掲載されたものと同じである。転載を快諾された『新潟大学言語文化研究』編集委員会には、この場を借りてお礼を申し上げたい。
- 1 John Forster, *The Life of Charles Dickens*, (London: Dent, 1969), II, 294 (Bk. 9, Chap. 5).
 - 2 Charles Dickens, *Our Mutual Friend* (Harmondsworth: Penguin, 1980), p. 893.
 - 3 Dickens, *Our Mutual Friend*, p. 894.
 - 4 Sally P. Springer, and Georg Deutsche, *Left Brain, Right Brain*, (New York: W. H. Freeman, 1981) pp. 1–2. なお、本稿中における図版はすべて同書からのものである。
 - 5 (イタリック体は筆者) Charles Dickens, *Dombey and Son*, (Harmondsworth: Penguin, 1981) p. 613.
 - 6 Dickens, *Dombey and Son*, p. 673.
 - 7 Charles Dickens, *The Uncommercial Traveller and Reprinted Pieces* (Oxford: Oxford University Press, 1978), p. 196.
 - 8 Michael Steig, *Dickens and Phiz* (Bloomington: Indiana University Press, 1978) を参照。ディケンズは挿絵画家に対して厳しい注文を付けることで、自分の創作意図を明確に伝えようとする作家であった。ただし、挿絵画家フィズは具体的に彼女のどちら側の体側に麻痺があるのかをはっきり示すような挿絵は1枚も残していない。
 - 9 Forster, II, 398.
 - 10 Forster, II, 254.
 - 11 David Paroissien, ed., *Selected Letters of Charles Dickens* (Houndsmill: Macmillan, 1985), pp. 150–51.
 - 12 *The Life of Charles Dickens*, II, 294.
 - 13 Mamie Dickens, *My Father as I Recall Him* (London: Roxburghe, 1897) を参照。
 - 14 Forster, II, 250.
 - 15 Forster, II, 357.
 - 16 Forster, II, 411.
 - 17 Forster, II, 362–63.
 - 18 I. C. McManus, 'Charles Dickens: A Neglected Diagnosis' *The Lancet*, 358 (December 22/29, 2001), pp. 2158–61 を参照。なお、この文献については新潟大学人文学部教

授鈴木光太郎氏からご教示があり、入手することができた。本稿の医学的部分の議論はこの論文に依拠するところが大きい。この場を借りて鈴木氏に対して感謝を表したい。

19 Springer and Deutsche, p. 178.

20 Angus Wilson, *The World of Charles Dickens*, (Harmondsworth: Penguin, 1970) を初め、ディケンズの作風の変化についてはある程度まとまった共通理解があると考えて差し支えない。